

1. はじめに

音楽CDジャケットには、写真やイラストが用いられているものが多い。楽曲のイメージを想像させるものであり、楽曲を聴いたときに感じ取るものの補助になる。また、音から色を思い浮かべる「色聴」と呼ばれるものがあり、視覚と聴覚が関係あることが明らかにされている。[1]

本卒業制作では、聴覚と視覚の両面を意識して聴覚から視覚へと感じ取れる二つの情報を近づけられるような作品制作を目的にした。楽曲を聴き、そのイメージを元に Adobe Systems 社の PhotoshopCS2 を使用しイラスト化を試みた。

2. 調査

メディアとは、コミュニケーションの媒介をするもので、人に情報を伝えるうえで必要不可欠でなくてはならない存在になっている。[2] 例として、楽曲が収録されている CD のジャケットイラストは、その曲にあったものが使われることが多い。



図 1. ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第 14 番嬰ハ短調 op.27-2「月光」の CD ジャケット[3]

3. 作品制作方法

作品制作方法のフローチャートを下図 2. に示す。

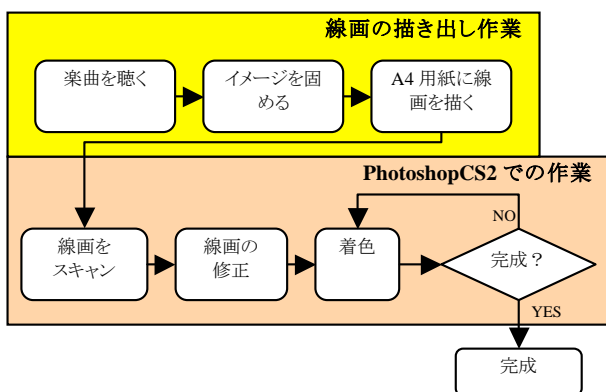


図 2. 作品制作方法

- (1) 楽曲を聴き、イメージの連想に努める。
- (2) 用紙にイラストの元となる線画を書く。
- (3) PhotoshopCS2 とスキャナを使用してイメージ線画を取り込む。
- (4) 線画を補正や着色しながら聴覚と視覚イメージの一致を繰り返し作品完成に近づける。

4. 結果

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第 14 番の視覚印象は、『空の遠くに月がでて、暗い空に月の光が照り、物悲しさを表現している。第 1 楽章のゆっくりとしたピアノの演奏からとらえられていると思われる。』であった。

聴覚印象は、『第 1 楽章のゆっくりとしたリズムを月光として何か予感させるようにであった。短調の曲は暗いイメージが強かった。』であった。

この二つの情報から、イラスト化が下図に示す図 3. の制作作品になった。他作品も同様な制作を繰り返した。完成作品は A1 判 11 枚である。



図 3. 「月光」のイラスト化

5. 終わりに

イラスト化をするためのイメージは、全てのものが反映できるものではなく、ある程度妥協する部分もあった。しかし、イラストの着色時にそのイメージをどのように表現するかを考え、Photoshop の機能を多岐に渡って使い、スキルを会得することができた。このスキルを使って今後につなげていきたい。

参考文献

- [1] 長田 典子:メディアと感性情報学(2006 大阪電気通信大学)
- [2] メディアの進化:
<http://www.komatsu-c.ac.jp/~yositani/medium.htm>
- [3] ベートーヴェン:『ピアノ・ソナタ第 8 番「悲愴」』他。(2008 BMG JAPAN Inc.)